

ムツゴロウさんのエッセイ

校長 村井 浩昭

「ムツゴロウさんは馬のしょんべんを飲むんだぜ。」高校の頃だったか、友人からの言葉は衝撃だった。それは「ムツゴロウとゆかいな仲間たち」というテレビ番組からの情報だった。動物番組は子どもたちに人気がある。日本テレビ系列の「天才！志村どうぶつ園」は志村けんさんの訃報で2020年にやむなく放送が終了したけれども、16年の長きに渡り放送され、後継番組も放送中である。チンパンジーのパン君との触れ合いは、視聴者も一緒に成長しているという感覚を持った。そんな動物との触れ合い番組の先駆けが「ムツゴロウとゆかいな仲間たち」である。

ムツゴロウさんこと畑正憲さんが、今年の4月に87歳で亡くなった。畑正憲よりもムツゴロウの愛称のほうが有名で、その経歴は、小説家、エッセイスト、ナチュラルリスト、動物研究家、プロ雀士と多岐に渡る。東京大学理学部で動物学を学んだ後、入社した会社に畑という名字の方が3名いたのであだ名で呼ばれるようになった。最初のエッセイに「ムツゴロウの博物志」という題を編集者が勝手につけたことでムツゴロウが定着した。「ムツゴロウとゆかいな仲間たち」は、様々な動物たちと体当たりで触れ合うドキュメンタリー番組で、1980年から2001年までフジテレビ系列で特別番組として放送されており、ムツゴロウさんの存在を世に知らしめる番組となった。その中で、動物の健康観察には尿の状態を調べるのがよいと動物の尿を飲むシーンが放送されたのだ。

ムツゴロウさんは、1971年北海道厚岸郡浜中町の約450万平方メートルもの広大な敷地に「ムツゴロウ動物王国」なる施設を築き、種類を問わずたくさん動物を飼育し始めた。私は、たまにテレビで見るムツゴロウさんしか知らず、無類の動物好きで、ヒグマと取っ組み合いをしている少し変わった人のイメージしか持っていなかった。当時のエッセイを読めばその人となり詳しく分かるかもしれないと思ったのだが、どれも廃刊となっていた。松山市の図書館に行き、検索すると何冊か見つかった。書庫に保管されていたので、出してきてもらい『ムツゴロウの青春記』『ムツゴロウの動物王国』『ムツゴロウの放浪記』を借りてはみたものの貸出期間に読み切れず古本を購入する決心をした。赤茶けた文庫本が届いた。

まず、『ムツゴロウの青春記』という初期のエッセイから読み始めたのだが、これはまったく動物とは無関係で、のちに結婚する純子さんとの中学校からのなれそめが赤裸々に描かれてあり、読んでいるこちらが気恥ずかしくなる内容だった。中学校での交換日記、中学生が恋愛することへの周囲の反対、学校の屋根裏での秘密、将来の結婚の約束などおませさんな二人の群像劇である。『ムツゴロウの動物王国』は、北海道に築いた施設での出来事を何かの雑誌に連載していたものだと思う。動物王国は、基本的に動物以外は鎖国されており、一般客はお断りである。純子さんの肝っ玉な行動も随所に見受けられ、青春記を読んでいるからこそ分かる内容もある。また、飼育動物も馬や牛、犬、ウサギ、猫はもちろん、アザラシやゾウガメなどの絶滅危惧種も積極的に引き取り、死をも隣り合わせに受け入れ、解剖を通して死因の特定まで行う自由な研究姿勢が伝わってきた。『ムツゴロウの放浪記』が一番おもしろかった。純子さんと所帯を持ったにもかかわらず、大学院の研究にも飽きてしまい、仕事もせずギャンブルで身を立て、未来の見えないところから抜け出す手前の話だ。この後、動物たちと広大な自然の中で対峙しながら王国設立という壮大な計画を成し遂げることになる。不思議な生き方だ。少々のことでは動じない大らかさゆえの生き方なのだと思うエッセイだった。

そういえば小学生の頃、伊予市に住んでいたのだが、近所でオランウータンを飼っているところがあった。路地裏に大きな檻があり、よく見に行ったことをふと思い出した。オランウータンの名前が思い出せず、弟にメールをするとすぐに「斉（ひとし）くん」と答えが返ってきた。